

意思決定支援を どのように考えていくか？ -意思決定支援の現状と 成年後見オルタナティブの可能性-

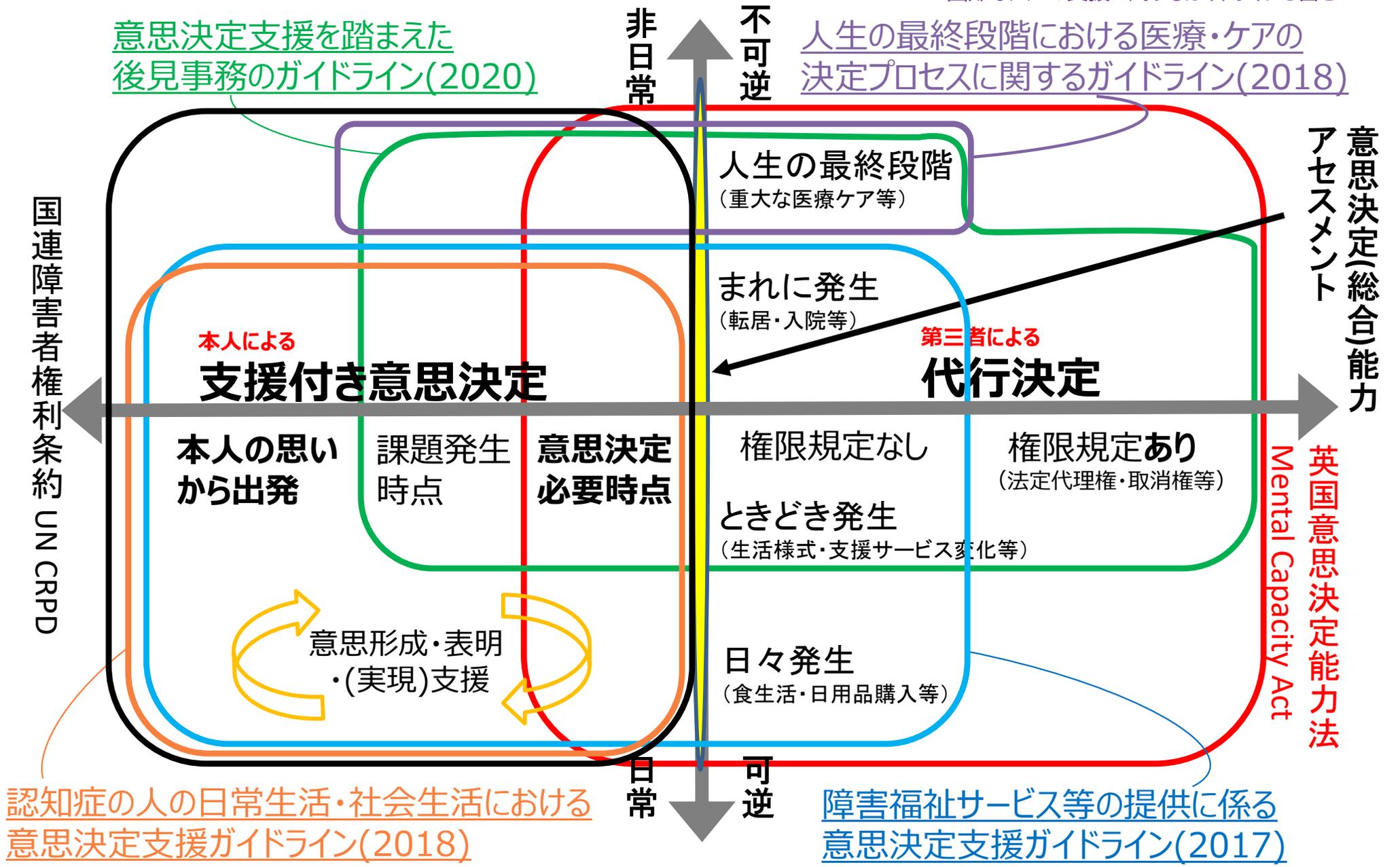
一般社団法人日本意思決定支援ネットワーク
副代表・弁護士 水島俊彦

2022年11月26日

韓日台高齢者・障害者権利擁護大会

日本の「意思決定支援」ガイドラインの対象領域に関するイメージ図 ver.6

※身寄りがない人の入院及び医療に係る意思決定が困難な人への支援に関するガイドラインも含む



意思決定支援を踏まえた後見事務のガイドライン

後見人等として意思決定支援を行う場面とは？

本人にとって重大な影響を与えるような契約等をする場合は、**意思決定支援が必要です。**

例

- 施設への入所など、本人の住む場所に関する決定を行う場合
- 自宅や高額な資産を売却する場合
- 特定の親族に対する贈与を行う場合 など

すべての人には、自分のことを決める力があるというのが支援の出発点です。意思決定支援は、後見人ひとりで行うのではなく、**チームで行います。**

意思決定支援のプロセス

チーム全体

1 チームをつくります



2 支援のための環境を整えます

- 本人が安心して意思決定できるような環境作りが大切です。
- 意思決定支援の目的や留意点を、メンバー同士で確認し合います。

3 これから行うミーティングの趣旨を本人に説明します



4 本人を交えて意思決定支援のためのミーティングを行います

- 1回限りではなく、何回か開催したり、本人に見学や体験をしてもらうこともあります。※上記1~3に戻ることもあります。

ガイドラインに載っているチェックポイントを確認しながら進めましょう！

意思決定支援後のプロセスへ(右側→)

後見人等の役割

メンバーがバランスよく選ばれるよう気を付けましょう。

本人の気持ちや個性に沿って準備が進められているかをチェックします。

チームがうまく機能していないときは、チームメンバーに改善を求めることも重要です。

本人が取り残されないように、本人のペースに合わせた進行になっているか気を付けましょう。

意思決定支援後のプロセス



意思決定支援を続ける

意思実現の支援に移る



意思決定能力アセスメント

支援者側が支援を尽くしたかどうか、チームで検討しましょう！尽くしていないときは、支援に戻りましょう。

本人は意思決定することが困難とは言えない

本人はその時点でその課題について意思決定することが困難

意思決定支援へ戻る

意思推定アプローチ

本人の意思・選好を推定する

推定意思の実現の支援に移る

本人の意思・推定意思を実現すると、本人にとって見過ごすことができない重大な影響が懸念される

意思の推定すら困難

本人にとっての最善の利益アプローチ

「本人にとっての最善の利益」を検討し、後見人が代行決定を行う

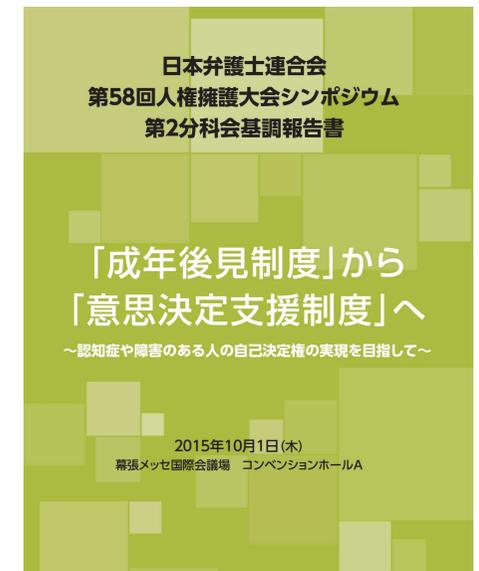
このアプローチは、最後の手段です。意思決定支援を尽くしましょう。なお、「本人にとっての最善の利益」とは、本人の意向・感情・価値観を最大限尊重しながら、他の要素も考慮する、という考え方で、「こうするのが本人のためだ。」と第三者の価値観で決めることは異なります。

障害者権利条約第12条の履行に関する 今後の検討課題は何か？

4

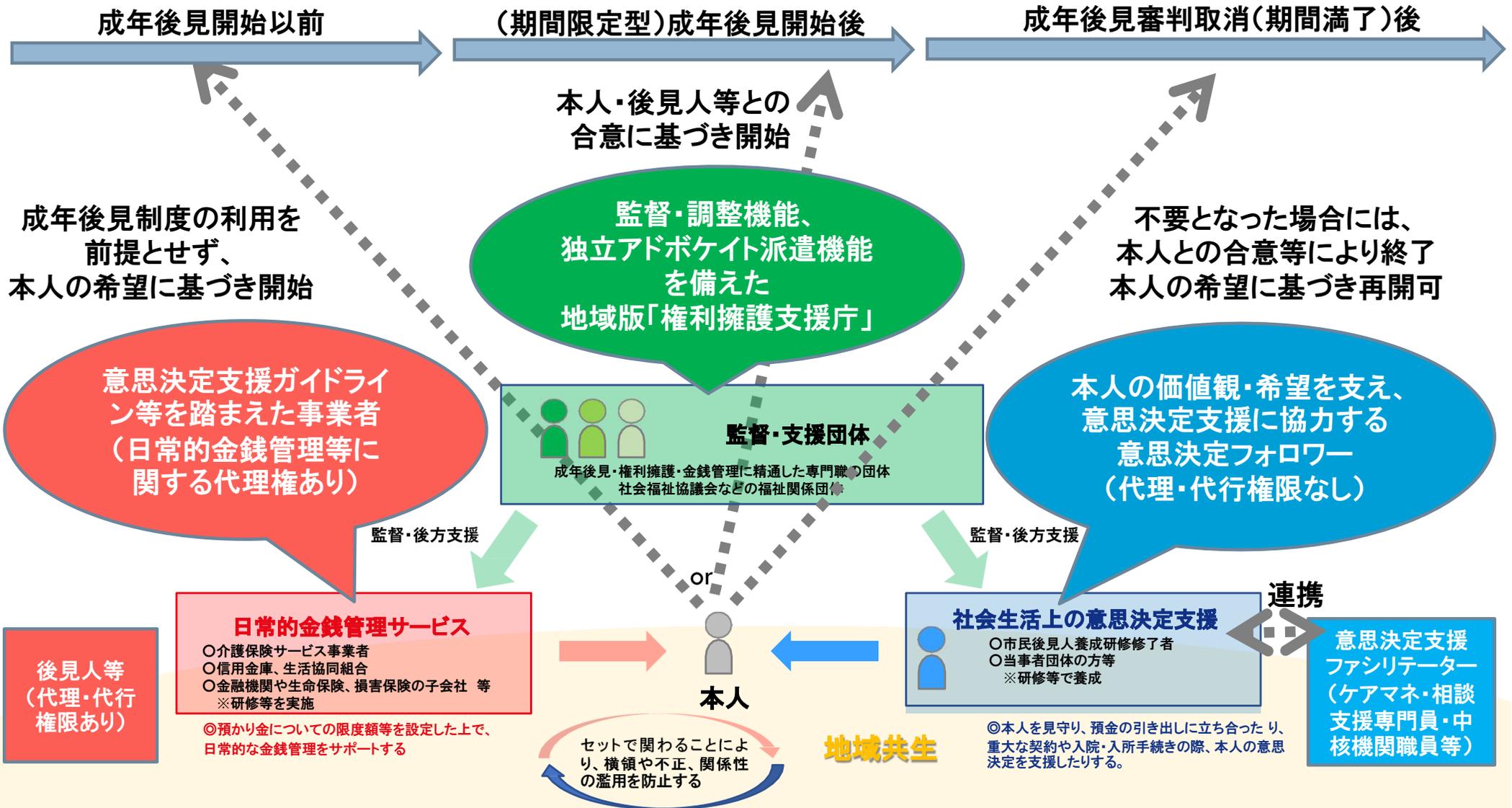
代行決定制度から意思決定支援制度への転換を、次の審査までに、法制度上、実務上どのように図っていくべきか？

- ① 成年後見制度その他の「差別的な法規定」のあり方をどのように考えるか？（一部改正？廃止？代替的な制度の創設？）
- ② 必要とする支援のレベルや形態にかかわらず、障害のある本人が支援付き意思決定を受けられるような仕組みをどのように構築するか？（代行決定（最善の利益）とは区別された意思決定支援概念の普及、当事者の視点を取り入れたプログラムづくり、関係者の人的・財政的支援、損害賠償責任を軽減・免除するための保険や免責規定の導入、濫用防止のための権限のある独立した審査・監視機関、ユニバーサルな視点をもった意思決定支援基本法の創設等）



総合的な意思決定支援に関する制度整備を求める宣言
(2015年日弁連人権擁護大会第2分科会)

成年後見オルタナティブ(代替制度)を模索する



令和4年度厚労省 新たな連携・協力体制を構築するモデル事業
「簡易な金銭管理等を通じ、地域生活における意思決定を支援する取組」を基に筆者の構想を追加

本人の選好や価値観を把握するためのツールの例

認知症の人の日常生活・社会生活における 意思決定支援ガイドライン 読み方と活かし方



←全年齢版

トーキングマット

子ども版→



【支援記録（本人の思い・価値観共有シート）の記載例】

→ 2つ目の事例を題材に支援記録の記載例（一部）を確認してみましょう。

書式や書き方にこだわらず、関係者と共有しておきたい「本人の思いや価値観の現れ」を書き留めることがポイントです。

日付	情報源 (記入者)	本人の意向・選好・価値観、 コミュニケーション方法に関する事実	どのような本人の意思が 読み取れるか？(記入者)
○/○	本人 (ヘルパー)	○突然「家に帰りたい」と話される。 ホームに移る前は、40年間自宅で生活していた。 「帰りたい？」と質問すると、無言でうなずいた。しかし、ホームから出ようとする様子はなかった。	自宅に帰りたいのではないかと？(ヘルパー) 何らかの理由で、ホームにはいたくないと思っているのではないかと？(地域包括)
○/○	本人 (地域包括 担当者)	日中の過ごし方について絵カードを使ってコミュニケーション ○ 居住者や職員とのおしゃべり・のんびり過ごす・手芸・短歌 △ クラブ活動 (最初は×に置く) × 規則・ルール ×におかれたカードについて「たまにはゆっくり休みたいときもあるのに、まったくもう。」 △「ちょっと嫌なことがあっただけ。今すぐ家に帰りたいわけじゃない。友人たちと離れて過ごすのは寂しいわ。」	クラブ活動は嫌いではないけれど、気分が乗らないときにも職員に誘導され、クラブ活動等に参加せざるを得ない=自由な時間をもう少し確保したいという思いがあるのでは？(保佐人) 「家に帰りたい。」という発言は、職員に対する不満がたまっていたことで原因では？本当に帰りたいかどうかはもう少し吟味が必要。(地域包括)
○/○	ヘルパー (ケアマネ)	短歌を見せたいとの申し出があり、見ると「一人とは寂しきもの……」と書いてあった。「また見てもらえないかしら？」と言われたので快く応じた。 ○本人が「短歌コンクールはどうなっているかしら。」と話していた。今度、クラブ活動で短歌教室の先生をやってもらえる？と聞いたところ「まかせなさい！」とこぶしを胸の近くに置き小さくしていた。	短歌コンクールは在宅時に本人が毎年投稿していたと聞いている。短歌を通じて本人の気持ちを伝えようとしているのではないかと？(かかりつけ医) クラブ活動に参加する側より「先生」になりたい思いがあるのでは？(ケアマネ)

記号の意味：○好き・やりたい △中間・不明 ×嫌い・やりたくない

トーキングマットを楽しく効果的に 進めるための7つのステップ TalkingMats

1	トピックと目的を 説明する	本日のトピック(テーマ)とマットを行う目的を説明しましょう。 例)「これからあなたが〜についてどう考えているかを確認するためにトーキングマットを行っていきましょう。」
2	絵のスケールを定義する	絵のスケール(尺度)の意味を定義しましょう。スケールの意味は、あなたが何を発見しようとしているかによって異なります。 例)好き…普通…嫌い 得意…まあまあ…苦手 やりたい…わからない…やりたくない
3	オプションカード を手渡す	考える人(本人)の正面にマットを配置しましょう。オプション(選択肢)のカードを1枚ずつ本人に渡し、本人に置いてもらいます。考える人が自然体でリラックスできるように配慮しましょう。
4	表現を促すための 開かれた質問を 試みる	オプションカードを手渡す際にはできるだけ開かれた質問をします。例)「〜についてはどうですか?」「〜はどう感じていますか?」待つことも大切です。身振り手振りや表情なども確認しましょう。
5	空白のカードを 活用する	ひととおりカードを渡した後に、「ほかに置いてみたいカードはありますか?」と聞いてみましょう。希望があれば、何も書かれていない空白カードに、文字や絵を書いて考える人に渡します。
6	内容を確認する (カードの位置も 変更可能)	置かれたカードの内容を聞き手側が理解できているか確認しましょう。ネガティブな選択肢からポジティブな選択肢の順に確認します。カードの位置も変更できることを伝えましょう(本人のここでの微妙な変化が読み取れるかもしれません)。
7	記録し、次の行動 計画につなげる	今回の結果を他の人にも伝えたいかどうか、聞き手から関係者に伝えても良いかどうか等を確認しましょう。次の行動計画につながることもあります。 セッションへの参加についての感謝の気持ちを伝えましょう。

©Talking Mats Ltd. 2020 (原文を踏まえつつ追記: 水島俊彦)

絵のスケール
(尺度)

オプション
(選択肢)

トピック
(テーマ)

トーキングマットの実践動画や
様々な活用場面を知りたい方はこちら →
(READYFORのWebページ)



ガイドラインの補助説明・実践事例などを収載

英国スコットランドで開発された本人の思いや価値観が見える化し、本人自身が「考える」ことを支援するためのツール。クラウドファンディングを活用し、「健康とウェルビーイングのフルセット」、「子ども・青少年との対話フルセット」の日本語版が開発された。